

速吸名門異考
古史傳六附錄

特56

256

014568-000-5

特56-256

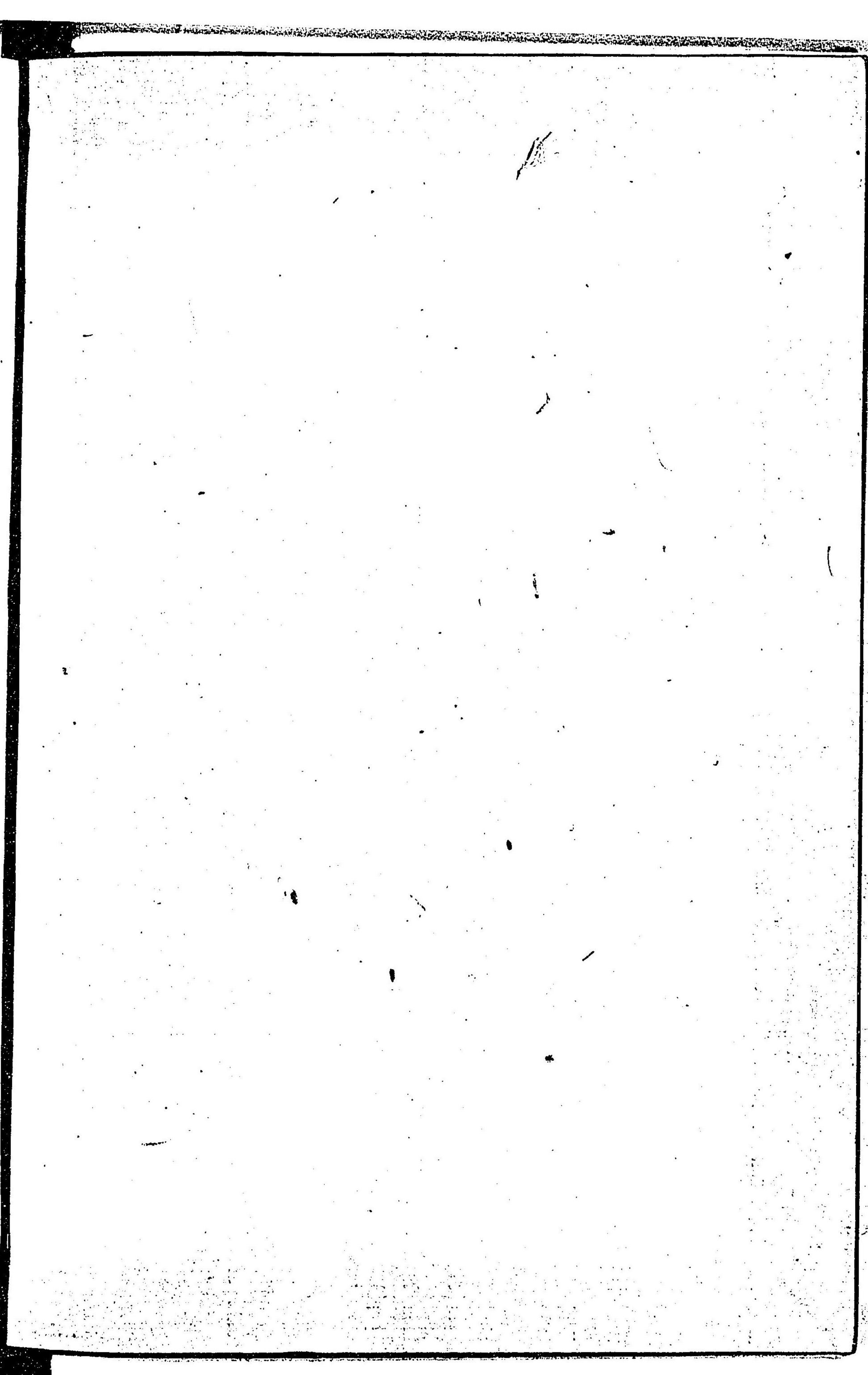
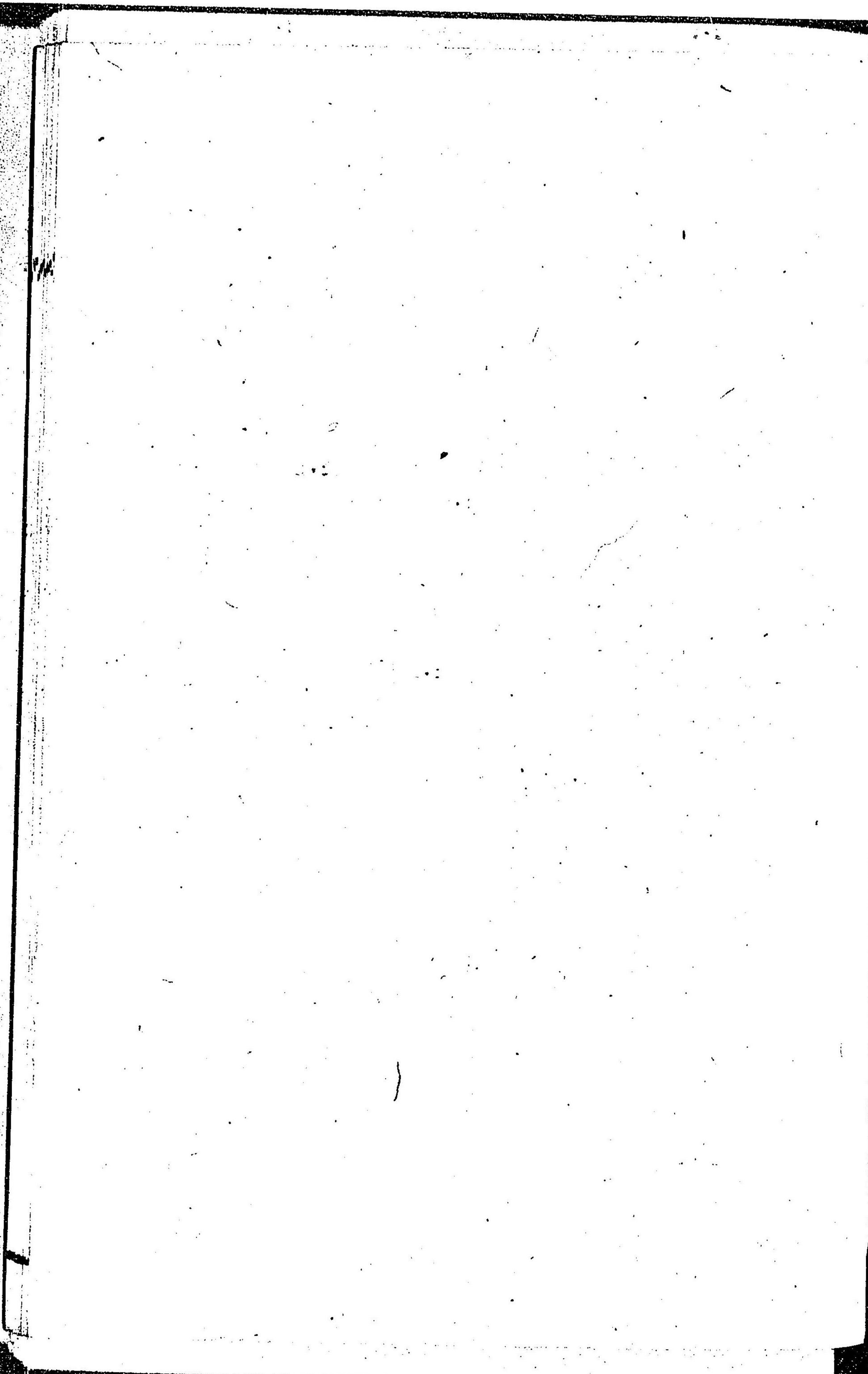
速吸名門異考 古史伝六之卷付録

田近 陽一郎(長陽) / 著

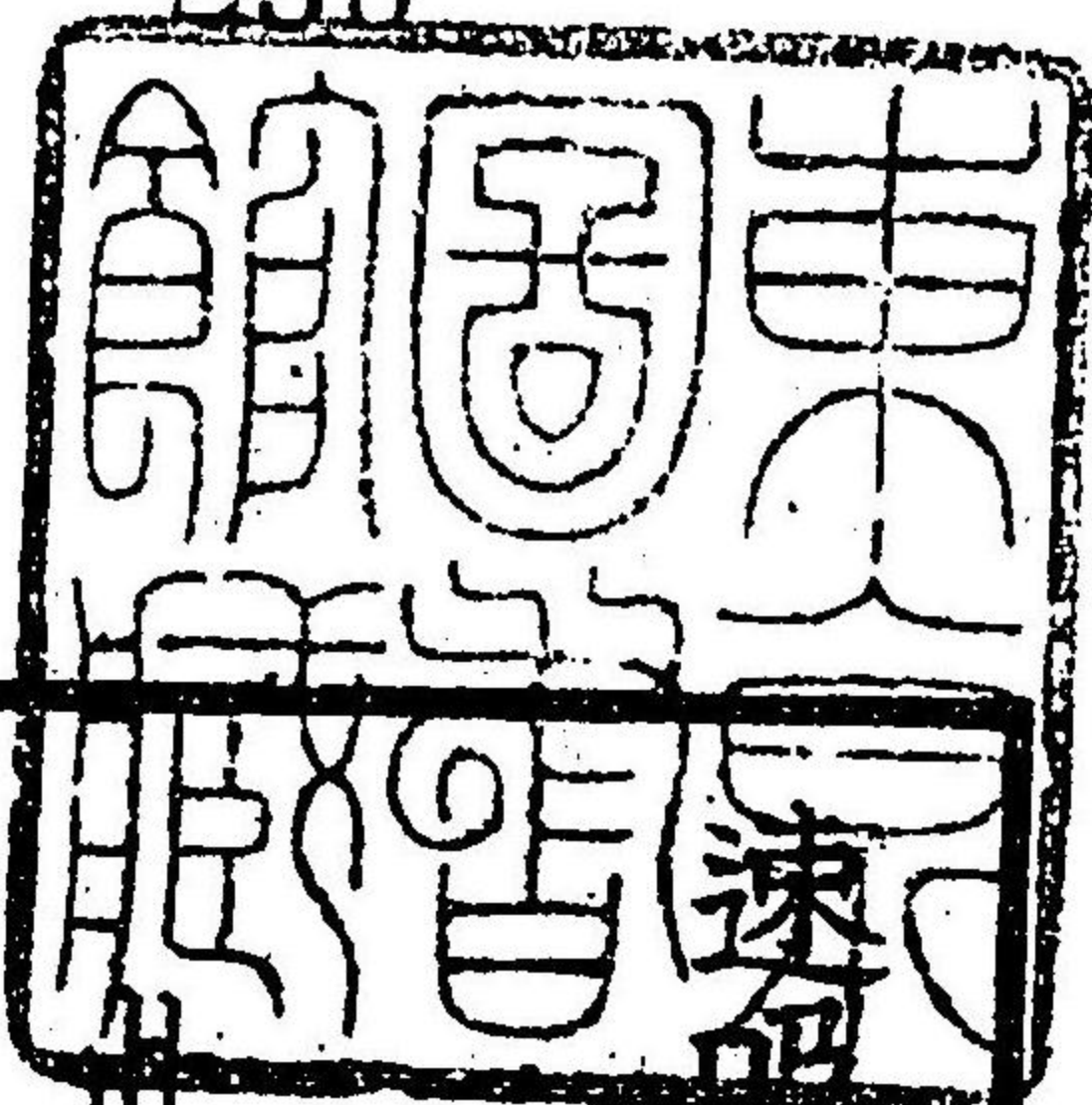
M18

ABB-0983





特56
256



速吸名門異考 古史傳六之卷附錄

氣吹酒舍門人 豐後國 田近長陽考

此考ハ往し明治五年と云年に佐賀關小物しるる也。

試記して其是や非やを師翁鏡胤翁をさし。本文中師説
おど云へるハ。篤胤翁をさ

せに問ひまをし。其返事に古史傳之御追考速吸門

之御考說等夫々并見中ニも速吸門之事ハ。一々御尤之

御事ニて先人之說とハ違ひ候へども悉的當いとし候

様被存候。元來地理を知られざる所を正考說も粗漏あ

る事。今在世ニ候ハ。必御說ニ隨ひ可被申候。猶又傳之

方ハ申迄もあく。悉く御詳說ニて先人も嘸々満足可被

○速吸名門異考 古史傳六附錄 ○一

致被存候。尤も兩様共早速靈前へ相備へ申候事ニ御坐候。一。白濱黒濱之石ニ御贈被下。得と拜見いふし候処。清淨美質目を驚うし候事ニて。いう小も靈跡疑ひかく被存候。と答おこされし故に。稿本一部早速吸日女神社の舊宮人ニ贈りし。彼神社の祠官關眞龍（註）。其産子等を勸免て。此浅板に彫り。其形木を神庫に納まむとせり。小就死て。此を古史傳六之卷に附録とせられし。去年の冬伊吹之舎に請まをく。矢野翁小も議られむふれバ。其稿本をおく。と云おこされし。からに。送るに。悲し死うも遺憾（註）なきうも。二世

翁既に歸幽せられ小死。矢野翁さへに肺疾患れて。此稿閱らるゝ事。に。か。月日經る小。今度三世翁を。舊年中御廻し被下候。速吸名門異考之事。矢野氏へ相談致し候処。同人申ニハ至極之御妙説と被存候。西田氏之説何分信用も難致存居候処。始て明白相成候と申居候。古史傳六卷附録と被成候て。少う差支無御坐候。と答おされ。故清書せむ。猶彼地の事眞龍に委く問聞くに。曩小記漏せる事此多々れバ。其事（註）も加。記加へ。其。前後の文意聞え難きを。後云ふと。徵をへ。時ハ明治十四年五月。速吸名門異考古史傳六附録。ニ

速吸名門ハ。神代紀ハヤスヒナド中ナ夙ハヤく見えて。人能く知る處あるを。其アリトコ所在傳ハらば種々論あるを。然るを豊前国小倉人西田直養翁ナホカモ速吸門考を著ハシ。豊前国企救郡早鞆ハヤマツ門トありと説ハレ。其を故翁も用られてあり。早鞆門小ぞ究キハルトは。是然る説ハ依傍々ナれ。式ある豊後国早吸日女神社を徒に捨スむ事ノ惜アラしげきバ。故翁を始直養翁小無禮ナし死シびトハハレれ。吾ハ口訣及記傳の説に従ひ。豊後のかコに説スのまマりシ死シ心チちセせラれテ。亦一ツ此考をバ立タスるハバ。直翁記傳の説を捨スられルあカらシ記傳に拠ヨとセられル。此神社の事をハ判ハへラれルさルハ。いウ小コぞヤ。偕先云ハくハ悠ユきキ事シあり。長陽ナガハル未其速吸門考ハ全本ヘンを得見トされルバ。

のノにニ加カくクにニ論難ロンナン々々れル。古史傳コシデン小引コヒキうレるガ。凡其考説オモをバ。洩モらレるハ引ヒうレるハ思オモふハまマにニまマ。古史傳コシデンあるハ戎據ウヂとして論ロンひ。且彼考を辨ワふハにも。古史傳コシデンにハあるハと故コ。其考説をバ悉シ小ハ掲出カケイデス。故此異考を見ミむハ。先古史二十三段の傳六之卷二十七丁をハ。三十一丁まで。を熟ジュくク閱ミむハ。さて吾の此異考に對オしテ。其異同を辨ワふハ。抑速吸名門の豊後オらハむト云イ據レハ。神名帳カミナカに豊後国海部郡早吸日女神社ハ。仁明天皇紀承和十年九月。豊後国無位早吸咩神ハ。奉投ホウテ從五位下ハ。陽成天皇紀元慶七年九月。豊後国從五位上早吸咩神ハ。授タ正五位下ハ。從五位上を授タ奉ホウ給キへル。と。御紀ミキに洩モらレるハ。○唐橋ナガハシ氏ノ豊後

圀志に引うれる御紀の文。咩字の上に比字あるハ。苗
印本古写本に依られしも此うと思へど。此人ひ
さぶる此儒者小て古文を尙まるに非れ。御紀に比字を書うれ
りとして。狡意に加へられしに。御紀に比字を書うれ
ざるハ。早スヒヒメと。音重ある故に。畧かれさる。速
サスラヒヒメあるを。式小速佐須良比賣と書うれ。蟬賤比
賣を出雲風土記。支佐加比賣と書かれさる。同し。され
ば古ハハヤスヒメと唱さ。古稱を亡ひ。今又古仕
奉。六所権現あど申し。ハヤスイヒメと唱め。今又古
社号。復しさるも。音便故に。ハヤスイヒメと唱め。今又古
御紀の文にも。つむも。ハヤスイヒメと唱へむ。非ぞ
其。序に云。古事記ある大戸惑子。大戸惑女。神此御名を。兩大
人。加に。かくに。説うれされど。此ハ惑彦惑媛の義あるを。
ト。ヒコと。音重ある故に。一のヒを省きて。唱ふる事を。
示して。亦書かれし。ふり。二音重れるが。省うる例ハ。河原を。
カ。ハ。飯櫃を。イビツ。干肉を。ホジ。
シ。猪垣を。シガキ。と云。是あり。也。あるを。以て。あ。此神
社ハ正しく。當圀海部郡佐賀郷佐賀關に。今ハ大社小て座

坐。是。下。に。此。神社及土地の事を云へる言どもハ。此
御社に奉仕れりし。関。眞。竜。小。野。秀。彦。等。に。問。聞。きて。記
せる。社。藏。ある。早。吸。日。女。神。社。略。記。と。云。物。小。此。書。記。せる。年
をも載せ。其。苗。記。古。文。書。ハ。悉。慶。長。の。兵。火。に。亡。さ。る。を。し。此
畧。記。を。其。後。神。官。等。此。記。集。し。物。と。ぞ。此。書。こ。に。引。く。文。の
外。ハ。書。紀。苗。事。紀。あ。ど。の。速。吸。門。の。事。此。の。外。又。統。舊。記
後。紀。あ。と。此。神。階。を。授。奉。給。ひ。し。文。あ。ど。書。集。し。物。あ。也。舊。記
ニ。古。老。傳。説。二。曰。天。眞。宗。豐。祖。父。帝。ノ。朝。二。日。向。ノ。圀。造。長
云。此。時。の。事。大。密。元。年。と。れ。れ。ハ。郡。縣。の。制。に。草。多。ら。れ。て。よ
り。五。十。年。は。か。び。お。や。及。ぬ。ら。む。さ。れ。バ。圀。造。ハ。い。う。一。次。よ
引。く。一。本。に。野。司。と。の。京。師。二。到。ノ。頃。船。五。十。余。艘。ヲ。艦。ノ。當
る。ぞ。然。る。べ。う。ら。む。圀。海。部。郡。速。吸。ノ。洋。ヲ。過。長。陽。云。洋。次。よ。引。く。一。本。ハ。名。門
名。門。に。同。意。と。聞。え。さ。り。速。吸。名。門。ト。云。ハ。豐。豫。兩。州。之。際。間
纒。三。三。里。ナ。リ。一。許。里。ニ。ノ。嶋。ア。リ。鷹。嶋。一。云。鷹。才。ホ。キ。ガ。故

○速吸名門異考古史傳六附録 ○四

ニ名トス。今高嶋ト云。長陽云此里數いぶうし此記の末も名所方角抄を引て海上七里と云
也。今現に七里河れば三里と云るハ非也。と前ハ思へ
巴也。後藤眞守が六神社考に大古ハ四國九州の間海狹
く川の如くありむむが國土の太るに隨いて開きより々
むと穴門の例を以て云へる言と。田近正徳ハ鑛山の事に
勞き其業に委き西洋人をも雇ひて地質の事奉と屢問聞
しを大古の里程古老の傳説に存せしを苗。亦其陝間ニ暗礁
アリ。高疾ケ水ト云。今高遠上ト云。長陽云此礁の事委く下に云べし。滿汐至
ル毎ニ。此石ニ觸テ天河瀉力如。往來ノ艤舶是ニ擬ス。潮滿
湛ト云へ臣國造ノ船進マズ。水主提取ニ至迄是ヲ怪所ニ。
忽波上ニ神光アリ。國造是ヲ見テ希有トス。親見ニ及暗礁
ノ上ニ神劍アリ。國造思ヘラク。速吸ハ上古ノ神境也。是則

神變神用ナラン。

長陽云神用とハ見おれぬ熟字也。若于

時偽砂眞砂姊妹ノ蜚アリ。二女ハ白ケ濱黒ケ濱ノ荒魂ナ

長陽云。偽砂ハイサゴ。眞砂をサゴと訛むをし。予見
る本にハ後人の傍註と見えて。偽眞の文字心得。黒
砂白砂に作て然るへきを。二濱ハ砂礫純白純黒ニノ衆色
ヲ書入。阿正きうべし。こを。

ヲ雜ヘズ。清淨ニノ神遊ノ地也。異稱日本傳云。豐後國海部
郡佐賀關有。白濱黒濱。生。黒

白石。若置。碁子。○長陽云此二濱の奇し事ハ。橘南谿子ガ
西遊記ハ。もろこし。玄宗皇帝此御時。日本よ。黒白自然の
碁石を獻む。其石冬ハ暖。心して夏ハひや。かふ也。故に冷
暖玉といふ。日本に手談池といふ有り。其池中。集眞嶋有
り。其嶋上。凝霞臺有り。此臺辺。皆此冷暖玉。ふ也。帝も希代
の珍宍。ふ也。甚是を愛し。給ふと云。此事ハ。繼誤史。おど。
其外。唐土の書籍に。多く見へ。也。予。九州に遊ひし時。豐
後に。其所有り。と聞て。まをち。行て。見る。佐賀。此關。よ。東
南。の方。に入る。木。こ。此。山路。いと。荒て。行。先。た。は。つ。う。か。き
に。藤山。吹。ち。り。残り。て。いと。深く。霞。あ。免。と。也。妻。木。こ。る。山。う

おろし道をきつ祿て日影もや午に過る頃山残皆の母り
麓に藍をせ多くあくと清らかよ青み渡りよ此山の
入海な巴海よ添ふて漁村何巴磯おれし小松の間に漁夫
の住家軒を並へよ巴行うふ人ハ豆此あとかたなる舟
ハ木葉に似よ巴志ばらくあれに對をれバ孝に画中にあ
る心地して人間の世界よあらばせれよ巴山を下まバ黒
の濱白の濱といふ所何巴山二つ三つを隔よ巴白きハ雪
比あくと黒きハ漆のあくと海辺皆かくのこくとく小して
色異あるをまよへば海までもかくのこくとく白の濱
ハ潮までも白きやうよ見へ黒此濱ハ又黒みよよま巴掘
り穿ても沙土おし其きよらうある事よとへんそのおし
唐土の書籍に手談池といへるハ此入海をいふあるへし
集真嶋といへるハ出崎此山をいふなるにや凝霞臺ハ出
崎の山の絶頂小肥後族よ巴異國賊船此遠見小置まよる
番所あ巴渺漫よる大海よ突出て高く聳へよる山のいせ
よ巴に築き立よるハ誠に凝霞臺ともいひつべしといひ
又豊後國志小も海濱有五浦其一曰白濱海面水色潔清白
石鄰々無一他石之雜汚其石瑩白玲瓏如玉不假製造可基
子其二曰黒濱云々海面廣二百餘歩水色如積鐵水底皆黒

石亦他石不雜其石真黒有光又自然碁子云々其五曰手段
浦云々按杜陽編段作譚蓋手譚是圍碁之稱故改之曰大中
中日本國王子來朝云々王子善圍碁上教待詔顏師言對手
王子出楸王碁局冷暖碁子云々本國之東三萬里有集真嶋
上有凝霞臺上有手段池中出王子不由制度自然黒白
分明冬温夏冷故謂冷暖王更産如楸玉狀類楸木琢之爲碁
局光潔可鑑按臺上有手譚池上字當作下云々あどあるが
如し西遊記の文ハ上浦御社のうさなり遠見山と牧の間
に出る道を登行しよまあ巴入海と云れど入江をあし濱
のよとみを然見あしよる小や集真嶋ハ群玉韻府に集賢
嶋に作る賢ハ賀の誤小て集賀あるべきと唐橋氏云れ
苑遠見番所ハ志にも望樓東南蓋古置関司之処と何巴此
地門司赤馬の兩関小對ひ丹海の門ある故に外寇此備に
置かれし事南谿子此言の如し関の稱も是故あると唐橋氏の言
慶よ藤原純友叛逆の時関を置れし故と云ハ唐橋氏の言
此如く非あり其たし志に論ハれよ巴就て見るべしよさて
黒ガ濱ハ大黒小黒とて二濱何巴白ガ濱ハ一濱あるが其
辺二三の濱白石に他石少雜れるのよ小て小白とも云べ
きよまある巴石の太經三四寸よ巴小を豆の如きよまで大小
定らば黒ハ平めあり白ハ丸し冬温ありと云ハ妄ある巴夏

も冷あるハ石此常にて此石に限るに非文。碁洞浦劫浦を
と圍碁に像れる名此辺に多し。まゝ兩濱の石を拾採る事
を神の惜ましめて重し。死事のありし物語も、うら聞持と
れど、事長々れハ云ハ、長陽嘉永二年秋初て行見と
し時ハ、白が濱の石、雪の如く玉の如く、濱の限充満て、眩く
むかひありしに、安政五年の春行見し時ハ、白石悉海中
引落して、清き津に凝りて、正海底おも雪比、如く、濱ハ白砂
のみ残れしより、死是ハ或やあとあき人、此石を像に、緋て、伊
取られしより、かくあせりとぞ、さて山家集の詞書に、伊
せれ、さうしと申嶋ハ、いし、の、あ、ろ、の、う、き、正、侍、濱、よ、て、
くろハ、いとゆも、あ、ら、疑、あ、く、此、濱、の、事、小、て、伊、勢、と、せ、る、
う、ぎ、り、待、る、と、あ、る、ハ、疑、あ、く、此、濱、の、事、小、て、伊、勢、と、せ、る、
を、誤、あ、せ、ま、古、河、元、辰、が、西、遊、雜、記、の、此、濱、の、事、を、云、る、糸
に、他、石、さ、ら、に、交、ら、ば、正、南、の、う、の、數、万、里、の、大、海、よ、し、て、大
風、の、時、小、ハ、大、浪、を、う、ち、よ、せ、て、山、の、腰、ま、て、も、う、ち、あ、る、
浪、の、へ、よ、黒、白、此、小、石、一、に、ま、ぜ、り、合、ふ、事、あ、る、に、風、や、み、海
濱、志、め、う、に、あ、れ、バ、い、つ、と、あ、く、黒、ハ、く、ろ、白、ハ、あ、ろ、と、左、右
へ、日、う、り、海、底、よ、至、る、ま、で、定、木、を、以、て、さ、ち、合、し、や、う、に、黒
白、此、日、う、ち、明、也、と、云、へ、る、を、始、濱、の、廣、石、の、太、あ、と、を、云、る、
皆、慙、く、實、に、違、へ、也、此、人、彼、南、谿、子、が、霧、嶋、山、の、絶、頂、を、極、免、

御銚を并せし事、西遊記に、ある、談、を、聞、て、甚、く、咎、め、
又、林、友、直、ハ、三、國、通、覽、圖、説、ハ、蝦、夷、地、の、説、を、實、に、違、へ、也、と、
て、言、を、極、免、て、罰、り、己、ハ、を、べ、て、人、れ、談、を、聞、て、ハ、記、さ、び、自、
其、實、地、を、踏、て、書、せ、る、と、し、煩、ハ、し、き、ま、で、云、さ、れ、ど、此、二、濱、
を、ハ、行、見、さ、れ、バ、こ、そ、か、い、傳、妄、を、ハ、記、し、さ、ま、二、濱、の、間、山、
二、三、隔、れ、る、あ、と、西、遊、記、小、云、へ、る、如、く、あ、る、を、バ、人、皆、知、る、
処、あ、る、を、定、木、を、以、て、云、く、あ、ど、何、て、ふ、狂、言、ぞ、も、元、辰、己、が、
記、せ、る、如、く、あ、ら、ハ、西、遊、記、を、罵、り、あ、が、ら、何、ど、て、彼、文、を、む、
破、洩、せ、し、ぞ、是、に、よ、り、東、西、兩、遊、雜、記、に、嚴、嶋、の、鳥、啄、上、の、
神、事、速、鞠、の、海、布、刈、の、神、事、鹽、竈、神、社、の、御、釜、の、事、を、始、聖、異、
あ、る、事、と、し、云、へ、ハ、甚、く、嘲、り、と、る、も、事、ハ、虚、實、を、え、糺、さ、び、
己、う、狡、意、の、隨、に、吐、け、る、言、あ、る、を、辨、ふ、べ、し、是、ハ、南、谿、子、林、
子、平、等、が、慰、免、の、爲、事、ハ、序、小、辨、へ、お、さ、て、西、遊、記、
西、遊、雜、記、紛、ら、ハ、し、た、書、名、あ、也、混、む、べ、う、ら、む、
二、蟄、扁、舟、

見經二国造ノ船二近ツク。国造是ヲ見問。汝等ハ何人ゾヤ。
二棹シ。良ノ方ヲ望テ數多ノ大船小船。名門ニ漂泊スルヲ
見經二国造ノ船二近ツク。国造是ヲ見問。汝等ハ何人ゾヤ。
蟄答云小女等ハ。速吸六神ノ神屬ナリ。祭主ヲ待此ニ有事

淹願神劍ヲ被上テ祭祀セシ夏ヲ請其言ノ如ニノ船ヲ曲
浦ノ裏ニ繫テ得處ノ神劍ヲ神ノ御魂トシ。廟社ヲ曲浦ノ
田刈穂ニ立テ祭祀ノ去ヌ。船ヲ繫シ處ヲ今ニ日向泊ト云。
田刈穂ヲ高風ト云。今ノ古宮ナリ。長陽云古宮の趾ハ古宮
中に人功ハ跡少ク存
れるトシ。眞竜云へ也。二人ノ蚤ヲ若御子ト云。末社也。長陽
社も眞竜の言に。稚御子鼻に。石社二座在りて。二人
ハ蚤を崇む。陰曆のハ朔ハ蚤等集ひて祭るトシ。云此六神神
代ヨリ此ニ坐ト云へ也。此時ヲ鎮座ノ始トス。于時大寶元
年也。と云也。まゝ一本に。訓点ハ眞竜ガ
差とるあり。舊記。人皇四十二代。
文武天皇之御宇。大寶元辛丑年。日向之國司上京都。艤船五
十餘艘。到早吸名門。于時國司之船曾不進。船中怪之。又於名

門有異曜。國司愈恐惶之。遙所乘艇有來者。國司招之。問曰。汝
等者誰耶。對曰。此處之蚤女也。國司曰。吾欲渡此名門。船曾不
進。又於名門有異曜。于常如斯有之歟。對曰。非常也。思於早吸
名門之海底。有靈劍一口。數多之鮫魚守護之不流。蚤等奉潛
揚。爲早吸神之神躰。於曲浦地。營宮欲奉鎮坐。待祭主歲久。今
留公船現。神光既時來歟。願公潛揚神劍。建宮於曲浦之地。可
奉鎮坐。國司曰。唯然。汝等可奉揚御神躰耶。對曰。奉潛揚矣。國
司曰。汝等名何云耶。對曰。妹曰黑砂女。妹曰眞砂女。因共到高
門岩。則妹黑砂入海。久而不歸。妹眞砂視之。曰。妹不歸。疑爲鮫
魚。息絕歟。然我又入海。如妹息絕而不能奉揚神劍。願公與刃。

斬拂彼惡鮫等。而可奉揚御劍。彌於有功者。我等二女。共可爲
末社神。誓則與刃。入海斬拂鮫魚。輒奉潛出御劍。真砂亦息絕
矣。此黑砂真砂者。黑濱白濱之魂神也。得祭主早吸之神。爲奉
鎮坐權現二女之蜃矣。國司太歡喜。則入船。曲浦湊。崇御劍。爲
神躰。營宮於高風浦。定祭田。祀儀矣。又立黑砂真砂之社。號若
御子矣。國司之船繫所。曰日向泊。又略記の次此文也。
緣起略曰。人王六十代。醍醐天皇御宇。昌泰之初。神光震耀。帝
闕詔博士使十二人占之。僉曰。豐城速吸之劍氣也。獻襟頗感
其靈威。詔而被遣勅使。長陽云。日本紀略に校むるに。此文に
符へる條あり。但し昌泰元年十二月
九一日丙辰。天東南方有電光。炫耀四方。又有迅風。と云事ハ
何也。又諸社へ奉幣使を遣されし事ハ屢あり。其内小ヤ

い。凡諸社の緣起と云物。此類の神異必ある。未臻神
と申。中頃僧徒の手に成る。多けとハ申。未臻神

廟既爲野火。燼焉。覓神劍於灰中。長陽云。覓一本に
不見の二字に作る。忽焉掛

清地之松枝也。詔幣乍到。輒收劍於花画。而立神社於曲浦。清

地。蓋神之所以託也。是ヨリ神事祭祀ヲ定。祭田ヲ寄附ス。是
社ト云。封内ニ廟アリ。清地ノ松ハ今尚有。婦夫松ト云。株根
ヨリニ股ニ。二木ナカラ。空ニ聳。靈松神木ナリ。○長陽云

本文の幣乍到と云。若ハ叙文。託也。託也。天子社を。天然
今ハ植。纏あるよし。さ。て本註の二木を。婦夫松ハ古のハ枯。て
思へど。彼。隈の松ハ二木を。都人。い。と問ハ。見。き。と
答へむ。ち。ふ。哥。われ。ハ。次。小。當。社。祝。詞。と。て。天。地。乃。常。磐。堅。磐
素。も。也。二。木。あ。ら。む。ハ。爾。豐。饒。志。海。乃。部。乃。重。浪。歸。留。曲。浦。清。地。乃。中。津。磐。根。仁。大。宮

爾豐饒志海乃部乃重浪歸留曲浦清地乃中津磐根仁大宮
柱太止敷立天高天原仁千木高知天速吸名門六柱乃神達

聞於是列官社云。長陽云泰昌ハ昌泰の誤あるべし。是れり

し事前に引一日。神武東征時。到此門祭。速吸神。遂創鴻基。

長陽云此事皇典ハ見え交。其爲神所祭。即天神氏時物也。其質似簡策。長

二尺餘。潤寸半。厚二分強。凡二十餘枚。韋條編之。皆神代文字。

如科斗。漆書多。漫滅。韋亦將絕。手不可近之。慶長五年冬十月。

罹兵燹而滅。適得此舊記。収載以廣異聞云とあり。西遊雜記

の神社と号せる有り。此祭神詳あらむ。社傳より神武天

皇東征の事らんとて。日向より発し。此浦にて船揃有し時。祭

り置給いし海神として。海内第一の苗地といふ。古し

へハ大社にて。科斗の文字此記有る。竹筒を以神籙として。

外種。此神密。慶長年中迄も。此社より有りしに云々。神社殘

り。密も。火をわけて焼討と云。此時科斗の竹筒焼失。數の神

筒ハ筒の誤ひてもあるはし。前に云々と約えよる処に。彼

合戦のさまを。神主の太田方也。岡の城よ。押寄せて。火

攻せしを記せれど。実にさかへるか。し。故に。畧さ

れ。此戦又炎上のさま。吾が家譜に記せるハ。始祖田近。長祐

主家の爲に。古田。重則と共に。一手の勢を率て。家康公の大

津の本陣に出し。際。黒田。如水。侯の讒。訴。屢。有。て。公の疑。累

を。船中。旗揚げし。故。主人。中川。秀。成。侯。白。杵。城。攻。ら。る。は。此。報

を。船中。旗揚げし。故。主人。中川。秀。成。侯。白。杵。城。攻。ら。る。は。此。報

を。船中。旗揚げし。故。主人。中川。秀。成。侯。白。杵。城。攻。ら。る。は。此。報

得昔記と有りて唐橋氏の言に似と也凡て漢学者の引書
をいふる愛と丸古文小ても己が意の隨に漢文に記し
て記せる故に文此狀小て時代を考ふる事此をらさる
遺憾き事お正うし祠記の事次論ふべし○簡策に似と
るちふ物此事を秀彦に問ふにう初て聞及びし事おしと
云へ也畏多れと御神懸ハ何にませると問へハ是ハ神祕
とて何らハに申せぬ事おぐら劍にませりと云死されバ
簡策に似とる物ハ什器あるべき古社何に用ひし物
ヤ新井君美主の云ハれさる出雲大社に神代也傳ハる
と云漆書の竹簡を始藤原貞幹う好古日録に古竹簡凡二
十四枚曲尺ヲ以度ルニ長八寸許廣五分餘上下韋ヲ穿ツ
孔アリ鏡所ノ篆奇古々色糊スベシ疑フベクモナキ漢前
ノ物也云々と何るも同類の物ぬるはく又予現に東京博
物館列品の古器物中に貞幹う云処と同狀の物を見と也
墨書と覚しき漢字処々消殘さり是を思ふに手簡とハか
かる物にハ非る今竹以て尔さまに製して消息を物
か卷納免て紐を結びて封をさし人に贈りてバ受る人ハ
披見て後其文字ども拭去りさて返事書して答へむハ古
雅にして紙の冗費を省くは返事書して答へむハ古
しも何れバ今此卷物此如く至重の事記して秘おく物小

や何らむ此を漢物と思ふ右二此傳就是々む知らる大
を貞幹が例の儼お正うし右二此傳就是々む知らる大
密に始て古官に鎮座目泰に清地小遷座とし祠記ハ神代
より古官に鎮座よて大密又清地に遷座昌泰ハ列官社の
時と以年号ハ同くて事實の年登太く差へるハいかにど
やかくて因志に引ける速吸祠記と云物いうある書おや
いと見まふしき物あるが眞竜秀彦等も知らざるをい
れバ社藏は非るべし接ふり肥後人井沢長秀う著述書
目に豊後速吸日女社記と云か何巴志ハ總て社字を祠
字に替へ式ある戎をら神祠と改め記されれバ井沢の
社記の事お何らむ但し西遊雜記の説ハ志と全同傳と
聞おるに紀行おれば關よて記しさるべく記中に秀彦が
家に藏さる布袋石筑波山おと云盆石を見愛さる事お
れバ上浦まで行さる疑ぬれど白黒二濱の筆記に於
て其憶測妄記ある事著明きを見れバもしハ肥後に於
て井沢氏此社記を見さて後よ巴杜撰せし小も何らむ
又唐橋氏因志の撰ハ大業よて因中此何らむの神社佛寺
れ縁由どもを掲ぐると各其什藏の縁起文書おどを摘
りて一定此文法に成文をるべきあらバ校合居う鎮座
と遷座の年代を取違へし小も何らむ又ハ祠記と云物

井沢氏の社記此事ありとをれば、彼人今昔物語を私に改訂削除せし如く、さうしらを加へて、遂に社傳と差異のいできしにもあらむ。熟く訂をべし。○志よ、伊井冊、等、神淨、潜潮中云々とあるハ、今も関人に、彼、磯の段に、上瀬ハ、瀬、急と詔ひし上瀬を、阿波の鳴戸下瀬を日向の小戸中瀬を此、佐賀、関の端門ありと云ケ、あるを思へば、関よさる説のありし小こそ、又神武東征云くとあるも、彼日向泊を神武天皇此大御船泊し所と云説、是亦此地に行ハる、事あり、されど天皇命を徒に日向とまをべき、非此ハ日向、國司此くと然る説に思ハれ、又速吸之門の御禊の地に非るは、神典上に灼けまば、予ハ志をらく略記此傳に従ふべし、と、簡策に似るちふ物の事ハ、虚妄とも得定をむ。さて此神社古八位田を附られた。御榮ましく、字、建久二年小大友家の領地とぬ。位田ハ廢れた。大友家と。二十五貫の社領を寄附せられ。弘安八年の圖田帳よ、國領佐賀、郷百賀、関十一丁、関權現御神領地、頭大友兵庫殿とあり。此所佐も二十五貫文之本田、都合二十丁三反九十歩、天文二十二

年の地檢帳を始代々此檢帳、又神主領田畑五丁九反二百四十歩、天正十八年の書付あり、今に存りとぞ。大友家亡びて、加藤清正主れ時を、肥後熊本侯の領地と成。加藤家を、細川家に及ても、五十石の地を寄附せられ、奉仕の神官も多にありて、神主一員、宮主一員、檢校一員、祝主一員、祠官八員、神人二員、あり、僉其職世々襲て仕奉れ。とし。又神馬の牧五十町餘あり、馬五十四を、多き時八百匹、小も及ぶとし。さて中頃、小僧侶も仕奉りて、關六所大權現と唱へしを。六所とハ、高嶋、御崎、高萩、藤嶋、五、年、に吉田家に告て、古此社號に復し、とぞ。凡古き神社は、衰へませるが、多く、榮ませるも、僧徒の手に、穢れど給

牙教小。此御社はしめ。今にかく御榮ませるおせ。いんも尊
く愛し。況事におせ。序に。當社に傳ハる。祭奠此式おど。聞け

日。小の月ハ廿九日あり。先神主ハ廿一日より。抑大祭ハ六月晦
日。をり。檢校以下。輿丁まで。ハ廿五日より。潔齋を。輿丁ハ兩
親。何る者。を撰ぶ。其故ハ。親を喪ひし者ハ。其死。尸に。手觸
る。故に。手觸る。あき。を撰ぶ。御衣。を撰ぶ。是。を。御裝束。會と。云。御衣。を
う。ら。び。さ。て。廿八日。御衣。を。撰ぶ。織。女。と。し。清淨。の。室。に。齋。誓。り。て。
亭。績。機。織。せ。し。む。亭。績。む。に。ハ。指。を。淨。水。に。濡。せ。唾。を。吐。り。て。
事。と。云。け。機。具。も。別。に。備。へ。巴。此。日。と。翌。廿九日。ヲ。三。十。三。蔓。行
幸。何。り。御。身。濯。會。と。云。御。旅。所。ハ。社。前。の。濱。あり。晝。後。汝。の。さ
し。入。る。を。待。て。渡。御。あり。著。御。あり。て。飛。久。米。と。て。白。米。と。小
麥。と。雜。へ。と。る。を。神。輿。に。向。ひ。撒。り。長。陽。云。久。米。と。ハ。内。侍。所
の。御。供。米。を。オ。ク。と。神。輿。に。向。ひ。撒。り。長。陽。云。久。米。と。ハ。内。侍。所
疑。お。し。次。に。御。漚。を。進。給。へ。菘。を。以。て。製。する。人。形。小。て。神
輿。に。濯。ぎ。奉。る。又。神。官。以下。漚。一。二。滴。掌。に。受。て。戴。く。さ。て。神
輿。を。始。群。參。ま。で。茅。の。輪。を。潛。脱。く。是。ハ。茅。輪。大。中。小。三。個。造

り。大ハ神輿中ハ神具小ハ神官以下參集人まで。潛ぬく
お。三。貫。目。許。あり。大。貝。を。蚕。等。を。り。獻。る。古。ハ。必。高。疾。ガ。水。よ
て。潛。捕。る。事。あり。し。多。近。世。ハ。所。を。撰。バ。以。て。飛。雑。へ。て。活。し。お
く。を。し。御。食。一。臺。是。ハ。米。と。小。麥。と。を。等。分。に。炊。雑。へ。て。團。を
ろ。し。を。戴。く。神。事。畢。り。て。火。之。晴。の。後。神。前。小。て。飛。雑。へ。て。團。を
ろ。し。を。衛。士。所。に。て。彼。神。主。以下。輿。の。神。酒。と。て。神。酒。神。饌。の。お
に。掃。り。て。火。合。と。て。彼。神。主。以下。輿。の。神。酒。と。て。神。酒。神。饌。の。お
の。忌。服。令。と。ハ。甚。く。異。少。て。珍。し。故。に。別。に。給。ひ。酒。飯。の。普。通
備。ふ。當。社。忌。制。一。父。母。忌。七。十五。日。相。火。廿。一。日。一。兄。弟。忌。五
十。日。叔。父。母。甥。姪。從。兄。弟。孫。共。廿。一。日。相。火。廿。一。日。一。懷。妊。夫。婦。共
伯。叔。父。母。甥。姪。從。兄。弟。孫。共。廿。一。日。相。火。廿。一。日。一。懷。妊。夫。婦。共
五。月。迄。社。參。一。産。婦。忌。七。十五。日。相。火。廿。一。日。一。懷。妊。夫。婦。共
相。火。落。百。日。一。相。火。廿。一。日。一。難。産。百。日。相。火。廿。一。日。一。懷。妊。夫。婦。共
一。交。合。三。時。一。死。尸。觸。者。五。十五。日。相。火。廿。一。日。一。懷。妊。夫。婦。共
一。大。蒜。十。四。日。一。菘。七。日。一。兔。狸。七。日。一。猪。汁。一。日。一。葱。三。日。一。鹿。五。十

○速吸名門異考古史傳六附録 ○十四

日相火廿一日。一干鹿百日。相火廿一日。一鳥三日。一燒失百
日。一江豚七日。右此旨堅可忌也。延德四年六月於當宮自古
服之無制所謂服者。祀儀以來之。祀法ナルヲ以テ用ヒズ唯
忌齋而已ヲ以テ專トス。神道ニ切ナル所可知矣。右忌齋者
古傳以誌置也。自餘小忌者。本制ヲ以推順而可憚矣。本
り文中誤脱。何りと見ゆ。私に改むべきに非不ハ。本
盜に書し。延德四年ハ。即明応元年。六月ハ。改元の前
あり。右此外天文以來。此文書ども多に。何れど。さまで。ハ。掲
出まらむ。凡山間地。あど。ハ。人心。狹。直。小。て。古。此。手。風。も。掲
存れるも。此。あ。れ。ど。海。辺。ハ。人。心。狹。直。小。て。古。此。手。風。も。掲
る。多。き。あ。ら。ひ。殊。に。當。地。ハ。船。著。小。て。商。人。あ。ど。多。く。出。入
り。遊。女。も。多。に。在。る。所。あ。れ。ハ。浮。薄。の。事。多。か。る。べ。き。に。あ。ら。う
神事。の。鄭。重。あ。る。ハ。い。と。尊。し。殿。宇。も。大。藩。の。官。費。を。以。て。營
まれ。し。事。あ。れ。ハ。莊。麗。盛。大。小。し。て。當。國。の。一。宮。と。ま。は。し。西。寒
多。神。社。あ。ど。ハ。あ。ら。う。に。優。り。て。座。ま。せ。ば。さ。て。予。う。郷。の
農。民。等。ハ。伊。勢。比。大。御。神。小。准。へ。て。関。大。神。官。又。御。閑。様。と。も
申。し。神。官。を。太。夫。配。札。家。多。旦。家。詣。る。を。半。参。官。と。せ。る。へ。参
宮。せ。し。年。ハ。作。物。実。よ。く。路。錢。を。費。と。も。詣。る。ケ。利。あ。り。と。て。
詣。る。者。然。依。多。今。度。ハ。御。改。制。に。神。領。ハ。更。れ。也。數。多。ハ。神。官

も。み。を。廢。ら。れ。社。格。も。郷。社。に。あ。り。給。ひ。熊。本。縣。此。事。依。し。に。
小野秀清が祠掌であつて。只一人仕奉るのみであつた。何あ
し。秀清ハ秀彦が子。小て。彼。何はれかくや。おとあ。祀。所。に。
鎮。ま。し。く。て。尊。祀。御。社。れ。る。あ。也。朝。廷。に。聞。え。て。官。幣。社
小も立まさむとしもあ。後。云。今。ハ。大。分。縣。の。所。管。と。あ。り。
あ。り。関。真。竜。祠。官。と。あ。り。明。治。十。三。年。此。神。官。改。撰。よ。て。祠。官
の。外。に。祠。掌。七。員。仕。奉。る。事。と。ハ。あ。り。ぬ。此。祠。官。ハ。明。治。四。年
に。定。給。ひ。し。府。社。縣。社。郷。社。小。奉。仕。る。長。官。の。目。右。に。云。牙。る
小。て。苗。官。八。員。の。祠。官。に。非。ど。思。給。ふ。べ。う。ら。ば。右。に。云。牙。る
言。も。小。て。此。神。社。の。概。此。事。實。知。ら。れ。と。也。○。下。浦。に。珍。彦
神。社。も。座。坐。せ。也。此。神。社。ハ。豊。後。国。志。に。祭。推。根。津。彦。神。乃。珍
彦。命。也。珍。讀。訓。宇。津。故。土。人。誤。曰。宇。都。宮。神。此。祠。祭。舟。具。爲。神。

少何也。後云眞龍也言に。此神社往古は然る後此御社あり
 たりむ。彼慶長の兵火に罹給ひてよ。形ばか。此社にま
 し。元祿の頃に一社を營みし。猶小祠ありし。近年屢
 官に請て。縣社に立坐し。社號も推根津彦神社と改稱し。去
 し。明治十二年。神殿拜殿か。とれ如く造營して。ま。然る後
 き。神社とはありませ。祠官祠掌ハ。早吸日女神社也。兼務
 小て仕奉る。境内に血池と云ふあり。こハ昔近邊に住け
 池水忽血の色とありし。バ甚く恐み。津を汲來て。瀝清め
 初。日びまをせ。バ。又もと此清水とありしより。亦云よし。
 今ハ。何せ。り。と。又。神木に千年松と云古松ありし。往
 し。天保。度。の大風に。枝多く折損。禊て。りし。を。嘉永。度。此風
 し。残れる。枝も折。盛て。遂に。僵木とあり。遺材さへ。散失。り
 し。を。近頃。少。此。切。片。を得て。殿内に。納置。け。せ。と。ぞ。古。人。の。詠

とて。古の里の。栄も千代の春うけて。危をみま。珍彦神ハ。早
 きたらむ。神籬の松と云。哥口碑に存れるを。し。

吸日女神社の枝社小もまして木本社とまを以とぞ。

山餘考に添て。碧川好尚主の云ハれし言小師の既く言ま
 しハ。總て世此中の事多。バ。海神の教諭し給ふ。いと少。から
 ぬ。中。軍。旅。術。策。の。機。要。を。も。殊。小。多。志。と。謂。れ。云。く。と。て。綿
 積。神。の。穗。手。見。命。に。朝。滿。珠。潮。澗。珠。を。投。奉。り。て。兄。命。を。憶
 苦。ま。を。以。方。を。教。奉。給。へ。る。住。吉。大。神。の。神。功。皇。后。に。種。く。の
 神。呪。と。も。教。給。ひ。波。瀾。を。新。羅。國。の。半。ま。て。押。騰。て。御。軍。を。援
 給。へ。る。稻。村。ヶ。崎。を。干。浮。と。奪。し。て。義。貞。朝。臣。の。義。兵。を。援。給
 し。事。亦。ど。を。始。諸。越。ゆ。て。も。張。良。が。蒼。海。君。此。助。を。得。し。類。其
 例。と。も。多。く。掲。げ。て。説。ハ。れ。る。言。の。中。に。檣。根。津。日。子。命。の
 大。御。船。迎。奉。給。へ。る。事。を。以。て。抑。あ。の。神。ハ。海。神。也。御。未。裔
 亦。ら。む。其。御。祖。綿。津。見。神。の。天。神。の。御。子。也。御。軍。子。助。成。し。ま
 ぬ。バ。あ。そ。龜。の。甲。よ。乘。り。て。來。る。と。云。ひ。能。く。海。道。を。知。る。と。然
 め。有。り。て。其。御。勲。功。も。許。多。有。り。と。云。ふ。ま。打。羽。拳。來。人。と
 有。る。打。羽。拳。師。の。説。小。後。よ。羽。扇。と。云。ふ。物。小。て。其。を。振。拳。て
 遙。に。招。れ。來。る。を。謂。ひ。固。也。天。皇。の。軍。師。と。め。稱。ふ。べ

き神如きハ。此を以て皇軍伐指麾する事ハ更ホも云ハ更
ホ布種々此用ひ方ども多ある事と知られり。又此境の神眞
羽扇此用法を傳へて諸葛亮等が用ひし事又此境の神眞
の專用給ふに石井篤任仙童其師仙と授かりし法を
以て師も製造せられし事多々記されり。披見るべ
し。さて推根津彦神ハ師説小ハ大綿津見神の御子振魂命
の御末武位起命の御子とせらるれど世に此神ハ猿田彦
大神再現形し給ひて皇艦を導給ひ。鴻基を輔け給へる
巴らふ説あり。是然る説に思はる。所狹々ハ云得法
きに非き。別に書せる物に思はる。猿田彦大神も御母蟬見比
賣神ハ海に由るのみならず己命の御母も御母蟬見比
るを思へハ海神の御量と述く。岐命をも神武天皇をも導
奉給へる。知らむも知るへうら。右ハとも。神武天皇をも導
命大御船を導奉給へる。大和の右ハとも。神武天皇をも導
て敵地に入。香山の社中。此壇を取來て神を祭り。遂に鴻
基を開うせ奉給ひし。偉勳を。今の朝廷いうに見行を
む。真竜等が社格の昇進を請へる。時教部省小て御調あり
し。他に此神を祭れる社あり。以て縣社小ハ列給へ
り。と聞く。今別格官幣社に祭り給へる神等。此比例を思
牙を疾くにも官幣に与りませへまを。何あ。○後藤真守ハ。

大和國城上郡大神社。社の後山に在て。高宮と申。式内大
和日向神社。小推根津彦命にませるよし云れど。式内大
和を冠れるハ。皆神坐日向神社と此みありて。大和らふ
大和氏此祖神あり。故少據ともあるべうらむ。眞守が説
を日向より發し。神武天皇を迎奉給ひし故の稱ありと
云ふ。あり。迎奉りし天皇の御本厩を。社号に負ませらむハ
最。遷きのみあらば。國名の日向ハ。景行天皇の詔より起
て。造の後の事あらば。彼命。此神の座坐をも。毛也も速吸
之門に由る小あり。○早吸日女神とまを。以ハ。いのある
神にまをらむ。其神さ。祢知依。依紀も。勢き。れし。社傳小六神
又六所。伊ハ。磐土命。大直日神。底土命。大綾津日神。赤土命。大
地海原諸神。とせられ。此ハ書紀第十此一書ある。伊弉諾尊
の身濯の時。成ましく。神等を捕へる小。大地海原諸神

○速吸名門異考古史傳六附錄。○十七

を。一柱の神とせしむ。論ふまでもあし。只其上文に速吸
名門ちふ目の何るに依れるのみあす。凡て社傳ハ速吸名
門を伊弉諾等の御
禊の地として云へる言小て取難し。是ハ書紀に往見粟門
及速吸名門然此二門潮既太急故還向於櫛之小門拂濯也
とある小て御禊の地ハ速吸名門に非ること論を俟とま
猶其櫛之小門を筑紫日向と第六の一書及古事記にあり
も此。前小引ける神歌云に天の狭霧地の狭霧や六柱の
少何故大山津見神野推神二神山野に因て持別て生ま
し、神等歟と思へ。山野に因て生まし、神等此海門
小座まはほき謂ふし。あえ昔事紀の始小天祖天讓日天狭
霧國禰日國狹霧等とあるにこれ
あどれ。豊後國志に引ける速吸祠記と云に伊弉冉尊と
るも神典に據あし。畏々れ朽強てまをさば。若ハ速秋津比

賣神小ハ坐ざる。其ハ彼神を古事記小水戸神と何す。大
祓詞に荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾座須
也何ると社地を清地といひ。社傳の禊祓の事に云へるに。
符へをあす。後に眞守が六神社考を見れば、眞守も速秋津
の音シユウと早吸のスウと似寄れるあど云説ハ
非し。大祓詞小ハ速開都比咩とも書りれとるまや。既小大
人等も。記傳小ハ速吸は。大祓詞に速開都比咩止云神。今
印本に比字脱と持可く吞氏年。也何る意小て。彼御禊小縁
也故補ひて引也。まる神名あるほし。と云ハれ太古傳小ハ大祓詞に荒鹽ハ
鹽の八百道ハ八鹽道の。鹽ハ八百會と有縁之疑かく此云
牝大壑速吸門ハ事ハ也。其ハ是御禊の時に生坐せる神等

此中に謂ゆる祓戸神四柱ハハラヒトノカミヨハシラあり、小在オモシて祓除ハラヘれ功德イサデ字ナリれし給タマふばぬと云ハれし也。此師説暗に社傳の赴に符へり。又前に記せる此社の大祭六月晦日よて、御身濯會と云ふ事、神實ハ何れ神心もまよはせ。早吸日女々稱ナメまハ地名に縁ユキれる御名小て。實ハ太古と云ハ此海門に座坐イマスを姫神ヒメガミにまして、其御社の無き哉ウレヒ憂給ウレヒひ。大寶オホタカラに到イタりて因司クワシ此過ヨマ流リを待ち、靈異リョウイ字シ示シせて、御社を乞給イタひし小ぞあゆめけむ。○此迫門ヒサドを速吸名門ハヤスビと云へるをいしハ前に記せり。略記に引くる舊記の文此如くあるを猶委ナく云ハむ。小此地を九州小ては更ナかす。豊後の因中にやとて、東に最イサさし出イる岬ミサキ小て。伊豫因宇和郡佐田岬小對ムカひて海上

七里阿ア也。其半に高嶋タカシマ阿ア也。此嶋の事因志。在海東三千里半。蔚蒼無人。高嶋の間地方と云一里許にして。彼高疾が水の

暗礁クワシあり。此礁土人ハ權現の礁と云ふし。此礁セのあや社傳に。礁の頭カ丸く

水中に入るに隨スひて繞マ大オホ也。水面ウミをア七尋ナナノボをかアれ所に横ヨコに崖イハヤ阿ア也。内濶ウチノワカくて底ソコに白砂シラスナを敷シける事コト豊トヨれ如ニく。純

白シラス小チして衆色オホシ雜シらま潔キ白シラス也。礁セ此四圍シホニキハヤ淖ウツ行ユキ疾ハヤく漲シタ也。渦ウヅまれ物モノ阿ア也。吸スビ吞ノむが如ニく。因ユて速吸ハヤスビと云とあ也。往イて天

明アカれ頃キリ宮主ミヤヌシ阿ア部ベノ貞サカ寛ヒロ也。云人思ヒひけるは。崖イハヤ此有アちふハ然

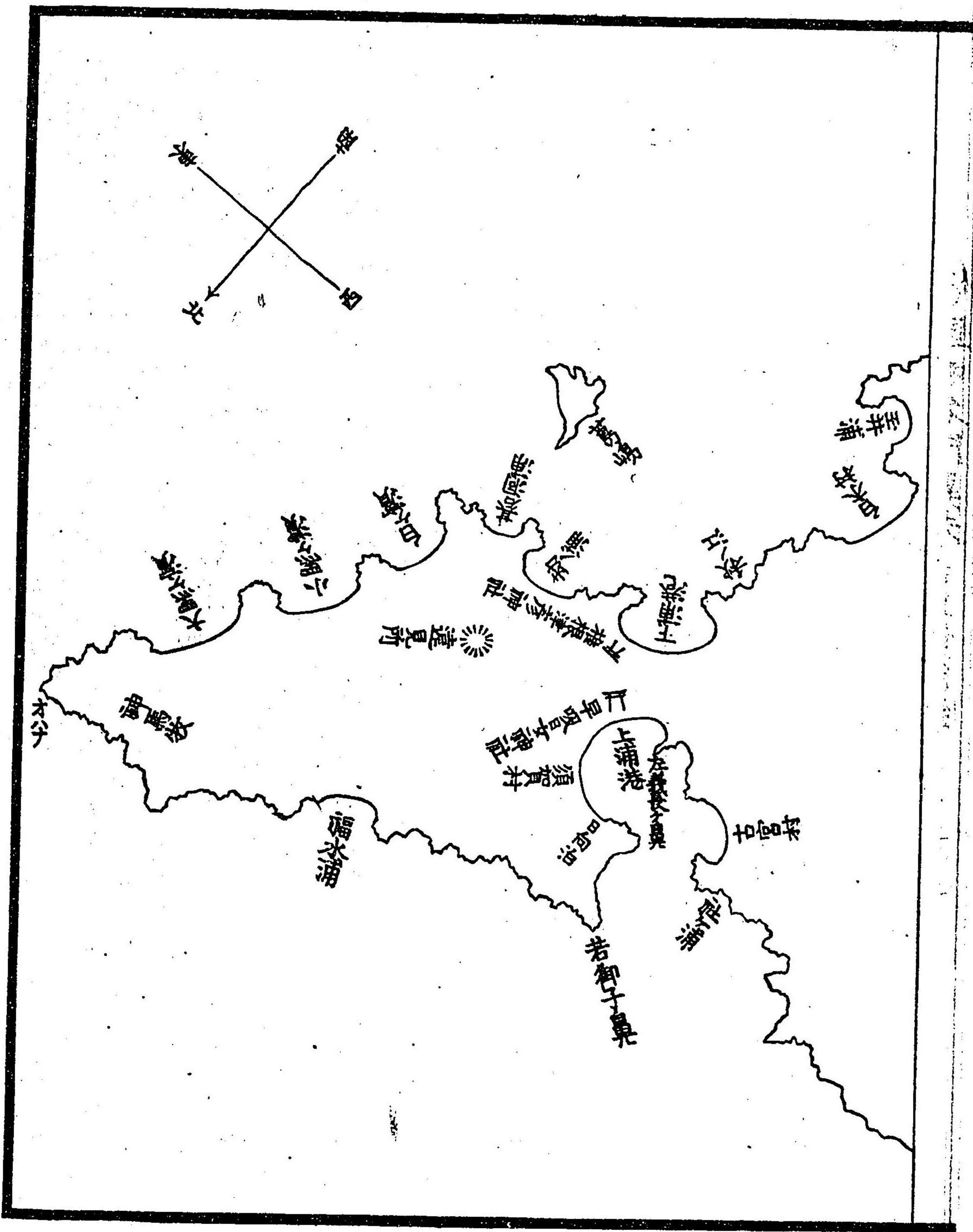
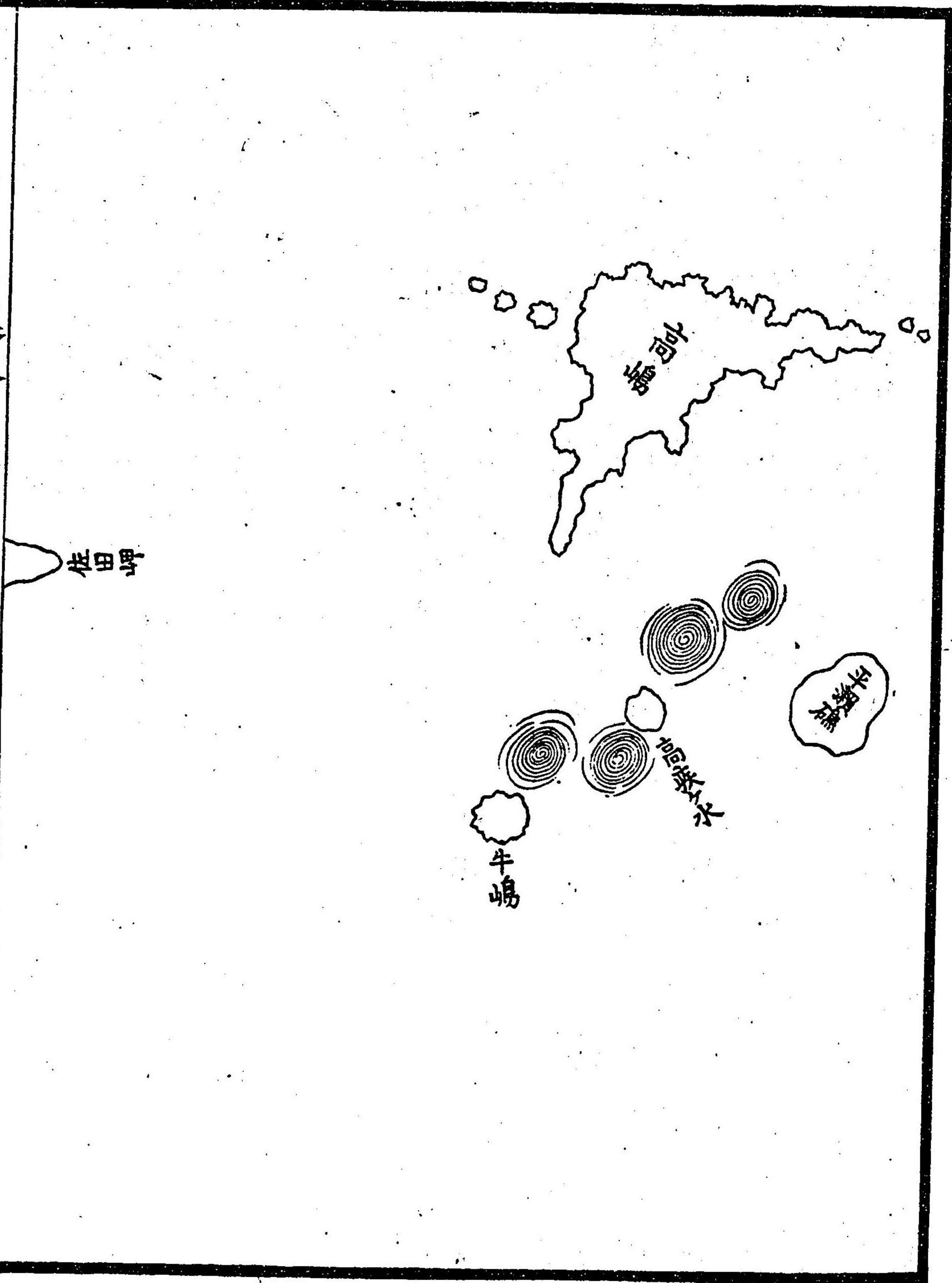
も何ナニるべし。内小ウチノチ白砂シラスを敷シくや云事信難コトノシタガハシし。豫カて聞ク其崖イハヤ内ウチ蛇ヘビ甚オホ多く阿アれ移ウツも。常トコハ潜カヅく事コト許ヨさば。只六月廿八日

のみ神饌に備に捕といへば。其状を問聞かむと。老功ある海士に問試しに。海士答けるやうハ。彼暗礁を最奇し化所あり。己只一度潜るるとあり。水面を三尋をか入るる所に。東方を覚えて。人ハ膝を折て坐れるが如き岩あり。其廣一反をか入るるは。長く見え。平にして海藻稻苗の如く生てい。長く美し。其岩をはあれ四尋をか入て。北方を覚えて。まゝ膝の如き岩出ると。其岩の真中に。口の口より七八尺程もあらむ。切抜るる如き穴あり。内を覗見れば。底白し。其穴小入て三尋をか入。其白く見えし處に到れ。白砂敷満ちて。疊四枚敷く程もあらむ。最潔白あり。穴は回

濶くして。石壁に蛇多く著て甚大あり。其を捕らむと。をるを拵に。太鼓を耳に傍小て打たが如き音。何所をもれく響て。下を三津湧騰るるや。凄冷しく成し故。只一潜に蛇二個を捕得て上りぬ。後に思へば。其窟は北方。穴貫通り居て。津にさし入るや。岩にせうれて鳴りし。小ぞあらむ。穴は奥を見しか。柄暗くて見え。このざり。怖しき處あり。其後六十尋に綱持行て。彼礁に。この海に渡を測試み。るに。猶底にハ得達かざり。何十尋立や知るは。うらび。其時捕獲るる蛇は。重一貫七百目あり。其貝子孫に傳へむ。今に持て。此貝今ありや。まう。今ハ海士を彼所に潜くを

聞うびや語れにやぞ。眞龍に話に。暗礁常ハ水中に没れ
 るが。朔望に頃。渚太く潤る。時ハ。少頭顯はる。南海を亘。渚
 此出入る。湍門小。渚い。速死に。此礁に觸れて。二に破れ。
 向小て行合ふ。渦まき。吸ふ。さし。渚小ハ内海此方に
 渦ま。引。渚小ハ外海此方に。渦まく。漁舟是に近く事を怖
 る。若過ちて其邊に行く。せきは。忽吸寄せられて。いかに櫓
 を押し。逃。とま。カ。及ふ。死に非。櫓ど
 もを舟に横。結つけて。渚此に。吸ハせ。渦に。卷加
 れを。渚直り。渦の止む。待て。榜去ると。櫓を横。と
 れを。舟を。小。忽海底に。吸没らる。と。眞守も
 伊豫地

渡るをり。此。渦に。吸ハれて。危
 きめに。遭。と。親。語り。き。うべし。あそ。太古に。速吸名
 門。ハ。名。お。給。ひ。ふ。れ。曲。浦。を。御。社。の。前。に。海。灣。を。總。て
 い。ふ。と。し。今。ハ。上。浦。も。上。關。とも。云。ふ。此。灣。口。狭。く。内。潤。し。
 船。多。く。泊。也。此。も。國。志。に。潤。四。丁。長。六。丁。と。云。う。べ。曲。浦。と
 処。小。や。覺。束。を。し。書。紀。の。曲。浦。ハ。鈴。之。屋。大。人。の。ウ。ラ。マ。と。訓
 れ。と。如。あ。ら。む。○。直。養。翁。豐。前。の。田。之。浦。を。ワ。ダ。ノ。ウ。ラ。此
 上。略。小。や。は。曲。字。の。一。畫。を。あ。や。ま。て。唱。ふ。る。小。や。あ
 ど。説。ハ。れ。と。れ。ど。か。む。か。り。の。事。を。捕。へ。て。扱。と。せ。む。小。ハ。此
 地。下。浦。の。南。小。も。田。之。浦。と。云。ふ。ハ。あり。又。同。郡。中。總。戸。郷。小
 畠。之。浦。と。云。も。云。也。翁。か。く。少。似。よ。れ。る。地。名。を。し。考。證。に。備
 ら。れ。あ。う。ら。鈴。之。屋。大。人。の。扱。ら。れ。る。正。しく。早。吸。ち。ふ。社
 号。の。平。家。物。語。よ。り。ハ。続。日。本。後。紀。小。も。三。代。実。録。小。も。延。喜
 式。小。も。出。る。を。捨。ら。清。地。と。云。へ。る。ハ。此。浦。地。方。の。總。名。を
 せ。し。が。今。を。纒。に。御。社。に。傍。れ。村。名。小。存。れ。る。の。み。あ。り。今。佐



○右此如く考定免て。紀記二典の文を辨了むに。書紀神武
天皇の御卷小是年也大歳甲寅其年冬十月丁巳朔辛酉天
皇親帥諸皇子舟師東征至速吸之門時有一漁人乘艇而至
天皇招之因問曰汝誰也對曰臣是國神名曰珍彦釣魚於曲
浦聞天神子來故即奉迎又問之曰汝能為我導耶對曰導之
矣天皇勅授漁人椎橋末令執而牽納於皇舟以為海導者乃
特賜名為椎根津彥此即倭直始祖也行至筑紫國菟狹時有
菟狹國造祖號曰菟狹津彥菟狹津媛乃於菟狹川上造一柱
騰宮而奉饗焉是時勅以菟狹津媛賜妻之於侍臣天種子命
天種子命是中臣氏之遠祖也十有一月丙戌朔甲午天皇至

筑紫國崗水門十有二月丙辰朔壬午至安藝國居于埃宮乙
卯年春三月甲寅朔己未徒入吉備國起行宮以居之是日高
嶋宮也。古事記小ハ。即自日向發幸御筑紫故到豐國宇
沙之時其土人名宇沙都比古宇沙都比賣二人作足一騰宮
而獻大御饗自其地遷移而於世紫之岡田宮一年坐亦從其
國上幸而於河岐國之多祁理宮七年坐亦從其國上幸而於
吉備之高嶋宮八年坐故從其國上幸之時乘龜甲為釣乍打
羽舉來人遇于速吸門爾喚歸問之汝者誰也答曰僕者國神
又問汝者知海道乎答曰能知又問從而仕奉乎答曰仕奉故
爾指度槁機引入其御船即賜名號槁根津日子也。序に
云打

羽拳を記傳にハ鳥此羽振如く左右袖を擧て打振つゝ來
るありと云れされど師を打羽ハ羽扇ありとして説ハれ
よる言前に引けるが如し。○又記傳の本文小を僕者因神
の下に御名脱と記して。○又記傳の本名○豆○鬼○古と補ハれふれど中
中にさうしうと思ハる其ハ此命即後田毘古神ありち
ふ説に依る時ハ珍考ハ速吸之門の淵小よそへさる一時
の齋名小て是実の御名あらぬ故に更に御名を賜へるに
そ非じう。然故に記ハる宇豆毘古とふ御名をを齋より齋
れたり々むも知るべうらに猶名を告らぬ例ありし云
れされど足名推神の恐々れど御名を覚べと白給へるに
吾ハ天照大御神の齋ありとのみ須佐之 如此く書並はるに
男神の御答よし事あり是ハ試に云 徒に打見てば書紀の文也。古事記の文也。齟齬て速吸門の
所在甚く異ある如くあれ極熟く觀れば實ハ異れるに非
ず。其は書紀をまべて漢土の歴史ハ文法を學ばれ紀年し
て記されされを事ハ順次違ふ事なく日向御船發し速

吸之門小。推根津彦命哉得給ひ。さて菟狹小幸まし。菟狹
津彦菟狹津媛大御饗奉。菟狹津媛を天種子命に妻せ給
ひ。それと筑紫小幸せる序あり。古事記ハ語傳へし古事
の趣を失ハざるを。宗ミ記されしも此故に。天皇命の御動
座の廉カクを。まが一連小記しお死。立返して稿根津日子命
の迎奉れる事ハ由を。又一條小書れしも此小。書紀に照
して味牙アは。稿根津日子命に遇給へるを。宇沙小幸ませる
とト前小。宇沙に幸まし。も。稿根津日子命の導奉給ひ
し小ぞ何ナニけむ。記中に神等の御系統ケイと御末の神等カミま
云へる文をり。記しお死。立返りて其祖神の御功績を
事を大人等ハ思洩されしハ。謂ゆる鹿を追ふ者ハ兔を願

更らふ諺の如く、大業おれ少けき事を、委くハ考られ
ざりし、亦らむ書紀の菟狹津媛を、天種子命、妻ハせ給
るより後に、別條に記されおむも此ハ、尚水門に至ませ
云ひ、古事記と云へるも、斯く辨ふるべし。紀記の傳互に
然る意をへあらむし。因云、珍彦命の神武天皇の大御船を迎
異ふる小を非。奉給へる時の事を、書紀ハ無龜とある
を、古事記ハ乘龜甲とあり。是を鈴之舍、大人、治龜とある
牙るとして、カメノセニノリテと訓れ、とるに、紀記の傳
甚く異ある如くあれど、是も死龜の枯甲を舟として、乘來
ませるあらむ。古事記ハ其、舳を謂て、龜甲と書かれ、書紀
ハ其、用を取て、艇と書かれ、り々む。古事記に、單に龜と
のみハ、無く、甲字を加、むれしをも思ふべし。故予ハカメ
ノカワラと訓む。龜甲を裏覆し、空しこむハ、舟の形あるべく
是を舟に用て、釣し給ハむ。空しこむハ、舟の形あるべく
牙りし、弓矢を、初ハ天之麻迦古弓、天之波、矢とあり。賜
子に射る、如ハ天之波、士弓、天之波、矢とあり。賜
用とに、其名を変て書れしに、同ハ、此ハ死龜の甲、ハ此も
紀記同傳あらむし。さて渡部賢ハ、此ハ死龜の甲、ハ此も

む、海神の幸、魂少して活龜あるべく。此時天皇海路に迷給
むと、此、龜ハ、珍彦命を乗せて奉給へるからむ。彼丹
後、因、水、江の浦、嶋子ガ、釣獲て蓬萊、誘ハれしも、此、神龜の
類あるべきと云へり。海神の皇軍を助成まつらむとて、
此、命を奉り給へるあらむ。説ハ、既く碧川、好尚主、師の
三神山、餘考に、加記されし、りき、活龜とせむハ、列子湯問、
篇に、渤海之東、不知幾億萬里、有大壑焉、實惟無底之谷、其下
無底、名曰瀛洲、云々、其中有五山焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰
方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊、云々、而五山之根、無所連著、常隨潮
波、上下、往還、不得、暫、時、焉、仙聖、壽、之、訪、之、於、帝、恐、流、於、西、極、
失、群、聖、之、居、乃、命、禺、彊、使、巨、鼈、十五、拳、首、戴、之、迭、爲、三、番、六、萬
歲、一、交、焉、五、山、始、峙、と、ある。よ、酉陽雜俎、諾臯記、に、敬伯
と云者、吳江、北、使に、頼まれ、濟伯に、使せしに、其、帰ると、死水
肩を免る、と、いひ、て、一、刀子を、投かり、其、所持して、三年
兩河の間に、住らるに、夜中、忽、大水、河、り、村を、拳て、没らりし
に、敬伯、獨、榻、牀に、坐して、恙、なく、曉に、至て、之を、看れ、ハ、牀を
一、大、鼈、ありし、事、又、楚辭、九、哥、河、伯、篇に、河、伯、比、事、を、魚、鱗、屋、
今、龍、堂、紫、貝、闕、今、朱、宮、乘、白、鼈、今、逐、文、魚、といひ、大、荒、唐、經、に、
も、北、極、之、神、名、禺、彊、聖、龜、爲、之、使、也、と、ある。よ、師の、三、神、
山、餘考に、委く、引り、れ、り、右、ら、を、以て、海、神の、龜、を、使、給、ふ

○速吸名門異考古史傳六附錄 ○二十六

事を思合はべし。佐賀関の海小ハ。今も亀多く住むをし。近頃疊三枚敷くむかりのも此陸に揚りるに。童數人乗て遊び。後に若者二人乗て海に出しに。人此乗れる間ハ浮居て。人泳うへせしうハ。忽海底に潜入するをし。六神社考より。然るを直養翁綱目の文おしやて。故從其國上幸之時乘龜甲云く。遇于速吸門也。何る字。岡田宮と曰大倭國へ上幸ませる。道行の目れ文おしや云ハれこれ移。いに目の文おしやも。從其國上幸らふ。其國と指む。戎吉備あらびやせば。最初御船發々。日向に非で何國やかせむ。然るを中途ある竺紫今の筑前。あしやせられもるハ。い加小ぞや。中途ある處を捕へて云ハむには。宇沙やも阿岐とも。考説の便宜此處に。定めらるるほきものをや。古事記のうゝある文おほおむしくて。かく區く此論

て。出來るるあれど。此記を撰ハれし時小ハ。速吸門と云。正しく世に知れて。何り々む故に。に從其國上幸之時と書うれ。速吸門云くよて。立返りるる文ある事ハ。亦されしものあるべし。是を近く譬へハ。十年余も前に紀行書ける人ありて。鶴崎より舟出し。大坂に揚り。東海道を下。江戸に著ぬと記し。おきさて。金毘羅詣て云く。膳所城ハ。いうに。何りし。府中にて誰よ逢へ。あど書らむを。後世に見て。右此所を。下総あらむ。常陸よやと論せむ。うおと。打知れ。るる事故。其國をハ掲ざるべきを思ふへし。但し他國人こそ。速吸名門を何所あらむとハ論ひも。此當地おてハ。往古より其名を亡へるに非。姓氏錄小も。大和宿禰出れハ。亦論する事も。あれものをや。姓氏錄小も。大和宿禰出自神知津彦命也。神日本磐余彦天皇從日向國向大倭國到速吸門時。有漁人乘艇而至。天皇問曰。汝誰也。對曰。臣是國神名字。豆彦聞天神子來。故以奉迎。即牽納皇船。以爲海導。仍号神知津彦。能宣軍機之策。天皇嘉之。任大倭國造。何

是ハ書紀を取られし事も亦るはく。亦に大和氏の
 出自を云へる文小。天皇命の御動靜を主と記されしに
 非れば。考證に備ふは記にをあらはす。此文小も早朝を序
 づき據あり。古語拾遺ハ。大和氏遠祖推根津彦者。迎引皇
 左。繁余等。發。自。日。向。赴。向。倭。國。東。征。之。時。於。大。倭。國。見。淡。夫。謂
 之。還。來。復。命。曰。有。人。耳。名。推。根。津。彦。即。召。率。來。矣。と。何。印。本
 誤。字。多。し。推。根。津。彦。命。を。得。給。へ。る。を。於。大。倭。國。と。何。ハ。太
 速。吸。門。の。在。処。の。扱。に。取。難。し。ヨ。エ。ロ。フ。ハ。承。謬。傳。を。れ。を。
 物。ハ。此。幸。の。事。を。速。吸。門。に。御。船。發。し。さ。て。速。戸。を。過。給
 ぬ。よ。し。に。記。し。何。也。速。吸。門。速。戸。異。処。有。る。事。判。然。き。文。亦
 證。に。取。不。れ。に。非。れ。バ。引。く。を。猶。云。は。神。代。紀。伊。弉。諾。尊。禊
 の。段。ハ。一。書。に。故。欲。濯。除。其。穢。惡。乃。往。見。粟。門。及。速。吸。名。門。然

此二門潮既太急故還向於橋之小門而拂濯也や。何處を思
 ふに。豫母津國と曰歸也。先阿波の鳴門。我見を。亦は
 し。湊急き故に其所を去て。速吸名門。小幸ませるまで。禊給
 はむ。海門を。見行ま。むらむ。あれば。中國道。小ハ渡。ま。は。ま。じ
 く。讚岐路。小。ま。れ。土佐路。に。ま。れ。必。四。國。道。を。め。ぎ。行。ま。し。初
 らむ。然れば。九州の地に渡ま。さ。む。ハ。必。此。佐賀關の。迫。門。小
 して。阿波門の次に見を。亦。は。べ。た。あ。や。其。地。理。を。推。了。知
 る。は。し。右。に。如。く。何。の。傳。に。依。て。も。速。吸。名。門。ハ。早。吸。日。女。神
 の。鎮。座。に。此。佐賀關の。湍。門。を。思。ハ。る。く。れ。き。○。速。吸。門
 考に。速。玉。之。男。神。を。ハ。マ。ト。モ。云。へ。る。地名。小。似。初。の。を。志

やて。何くれと説ハれくれ移。彼考總て此説ハ。今の早鞆ハヤトモの
湍門トト。即古ハ速吸門ハヤトモと云ハ。早鞆ハヤトモとハ速吸門ハヤトモちふ
言ハ訛ウソれトと云ふ論コトあり。然るを早鞆ハヤトモやがて速玉ハヤトモの轉ウツリと
以ヒ教ヲと死スハ。其迫門ハヤトモ古トハ。ハヤトモとカ。ハヤトモとカ云
ひて。ハヤスヒハヤトモを稱イハぎトし事明けく。返マて速吸門ハヤトモハ非
る據コトとハハれトあり。速玉ハヤトモ之男ハヤトモ神ハヤトモハ古トくトり然申せし事神
氏錄ハヤトモに見えて古稱ハヤトモあり事論を俟マたば。○序ハヤトモ云古事記姓
氏錄ハヤトモの速吸門ハヤトモ神武天皇ハヤトモ紀ハヤトモの速吸之門ハヤトモ共に神代ハヤトモ紀ハヤトモに速吸
名門ハヤトモとあるによりて。をべてハヤスヒハヤトモナドと地名ハヤトモの義ハヤトモに
呼ハヤトモぶとあれど神武天皇ハヤトモ紀ハヤトモあるに之ハヤトモ字ハヤトモを加へて速吸之門ハヤトモ
と書かれしを思へハ神代ハヤトモ紀ハヤトモある此外ハヤトモハ速吸ハヤトモの二字ハヤトモの
み地名ハヤトモにて之ハヤトモハ辭門ハヤトモハ迫門ハヤトモをさけ言ハヤトモめて之ハヤトモハて句ハヤトモをき
り門ハヤトモを清ハヤトモて呼ハヤトモへきうとも思ハヤトモハる。是ハ試ハヤトモに云ハヤトモのみ。又万葉六ハヤトモある。帥大伴卿ハヤトモの歌の

隼人乃湍門ハヤトモを速戸ハヤトモハ事ハヤトモあり云ハれある。是も其説當れ
るもれあらむ。今ハ早鞆ハヤトモハ古トく神龜ハヤトモハ昔トハ。ハヤトノ湍
門ハヤトモとい牙ハヤトモ正ハヤトモし徵ハヤトモ小ハヤトモして。ハヤスヒとハ云ハば速吸門ハヤトモハ
別處ハヤトモある證ハヤトモとこそなれあり。大伴卿ハヤトモの哥ハヤトモ早鞆ハヤトモの考證ハヤトモハ
を要ハヤトモあり。又粟門ハヤトモハ穴門ハヤトモの事ハヤトモありせられくれ移。是も神代
紀ハヤトモハ往見粟門ハヤトモ及速吸名門ハヤトモ。然此二門ハヤトモ潮既ハヤトモ太急ハヤトモとあれハ。粟
門ハヤトモと速吸名門ハヤトモハ正ハヤトモしく別處ハヤトモあり。及ハヤトモ字ハヤトモまよハヤトモ二字ハヤトモ
門ハヤトモ即ハヤトモて穴門ハヤトモの事ハヤトモありむる時ハヤトモハ。其穴門ハヤトモ即ハヤトモ今ハ早鞆ハヤトモの湍
門ハヤトモあれハ。是も返マて速吸門ハヤトモハ非ハヤトモる證ハヤトモとハあるハ。直養
翁ハヤトモ右三條ハヤトモの考説ハヤトモハ。我ハヤトモと我説ハヤトモを破ハヤトモられくれ論ハヤトモ小ハヤトモて返マて

長陽が翁れ説を辨ふる。助とハあるに仇む。然れ抄速玉之
男神と隼人乃湍門と速戸神社と伐同稱の轉とせられ
るを只聊似よれる稱呼を牽強られざるのみ小て固よ
信難し。又其を速吸門ちふ言れ轉訛とせむハ殊に迂か
む。粟門をアハトと訓て。穴門ハ牽強られざるハ師の採ら
れざるが如く。又豐玉と速玉と似とハ或ハ田浦を曲字
の一畫を誤て唱ふる小やあど云れざるも共に説得られ
とととも思ハれれば中ハ小も埤瀆のダンハ曲瀆のワダと音
通へと云ハれざるハいうにぞや。タとワと横に通ふを
もとととあれどハニを鼻よと出る音ゆて五十聯音の外あ
り是をニまハムに轉さむ。右に論へるハハ。彼考説の首
尾合ハで。いうハあるを辨ふる此みあハ。○師説小玄家に
謂ゆる。陽谷。咸池。甘淵。大壑。尾閭。谷神。玄牝。歸墟。天池。朝夕池。

百谷王。天地之根。無底之谷。あハも皆我速吸名門を云へる
小て。即ハ大地の會門ハあるが。列子湯問篇に。夏草が湯に答ふ
は言に。渤海之東不知幾億萬里。有大壑焉。實惟無底之谷。其
下無底。名曰歸墟。八紘九野之水。天漢之流。莫不注之。而無增
無減焉。其中有五山焉。一曰岱輿。二曰員嶠。三曰方壺。四
曰瀛洲。五曰蓬萊。云々。其上臺觀皆金玉。其上禽獸皆純縞珠
玕之樹。皆叢生。華實皆有滋味。食之皆不老不死。所居之人皆
仙聖之種。や何るを始。漢籍ハもに云へる言をもあハら舉
了。此上ハ奇く尊ハれ處あるとハ。何くれと説かれハるが。
此説ハ。三神山餘考。大扶桑國考。赤縣太古傳の二之卷を始。
玄家の事に係る著書毎に説ちられハ。其文ハに引得

べきに非ぞ。本書どもに就て見べし。又古史第二段第六段の傳に説うれゐる。形まよ。以爲生成。成。固。土。奈。何。と。ふ。詔。の。下。の。説。を。熟。く。見。て。心。ど。免。お。く。べ。し。古史本辭經の那行の解。小。那行二十五言は滑の義。小して。是に良行の五聲相副ひて。成。柔。滑。挺。乘。と。お。ま。依。お。よ。よ。河聲の冠て彼滑とあれあが。約して孔ま。空の活機を允せるとし。或説かれて。けて此五聲は。然起れる由來ぞ。神典ヲ稽ふる。小。神代紀一書。小。天地未生之時。譬猶海上浮雲。無所根係。其中生一物。如葦牙之初生。泥中也。と所見ある。此傳ふ。其中生一物。有依五字ぞ。此行の起原。ま知る。交文允る。其。中。と。ハ。云。く。天。先。成。而。地。後。定。然。後。神。聖。生。其。中。焉。ま。よ。天。地。之。中。生。一。物。状。如。葦。牙。允。ど。も。見。え。こ。る。皆。同。じ。事。也。然るを彼天地を分てし。

一物ヲ其中と稱する。一所あてて。其中小別り葦牙は如也。一物の生れる傳ふて。其葦牙あせ依物を萌騰りて。天日や爲也。は。天。霧。や。も。薄。靡。々。依。物。あ。る。が。易。元。は。象。形。也。と。事。を。て。小。上。小。云。依。が。如。し。云。云。は。て。其。萌。騰。也。と。物。の。易。元。は。象。也。と。志。哉。思。ふ。り。其。字。含。免。る。其。中。と。指。め。る。所。の。會。元。は。象。也。と。事。も。推。して。知。る。し。中。字。を。那。加。や。訓。る。言。は。意。を。滑。所。ま。と。成。所。の。約。り。て。生。哉。那。流。と。訓。る。を。既。り。那。聲。の。那。理。那。流。那。禮。や。活。れ。其。滑。く。や。志。め。る。所。と。也。滑。く。や。出。る。依。故。り。生。依。と。謂。ふ。然。ま。を。那。流。の。本。言。を。奴。良。流。あり。か。れ。説。文。了。地。易。爲。天。重。濁。會。爲。地。万。物。所。陳。列。也。从。土。也。邑。と。云。ひ。也。字。を。也。女。會。也。象。形。と。あ。依。也。此。所。の。古。傳。は。因。れ。る。制。字。形。る。こ。

ひ形はし賜牙るが。右れ古傳の發出する初りて。即此五聲
 元基とハ爲れ也。と何てて次ハ彼滑所の奴と流と奴と
 良ことあるを彼滑と詔せるが。阿那を約也。孔は義を
 せざるを委く解うれし。右小引けるハ要と何所
 浅のみ拔出するれまバ。熟く本書を見て知る。即女会も
 して。漢人の屍字を製れる。右速吸名門の大地の會門あるを
 此師説小思合を信也。當國の風土記の條。小穗門郷在
 昔者纏向日代宮御宇天皇御船泊於此門。唐橋氏の箋叙
 一年十月。悉誅豐後土蜘蛛賊。十一月至日向國。蓋是時王舟
 經於此耶。と何也。長陽按ふに。十月に直入祿野の賊を誅
 ひ給へれ。十一月向日此幸ハ。陸をりを行ましむ。日向
 向、高屋宮に六年。厨と何。爾長く留坐るハ。專筑紫の國と

を鎮撫給ハむとて。此御事あるべし。外に屢巡幸まし。高屋宮に座ませる時。其國ある
 御カ媛を娶て。豐國別皇子を生給へる。此皇子は御名を思
 ふよも。豐國御巡幸中に生ましむ。されハ本文國史に
 符ハむとて。疑海底多生海藻而甚美。案此郡産海藻海落諸
 藻俱多而美。と何也。又國志穗門。天皇即勅曰。取最勝海藻。謂
 嶼の條に。此地方産海藻と何也。便令以進御。本註の郡字。那小作る本も何り。久老翁保都
 郡。便令以進御。本註の郡字。那小作る本も何り。久老翁保都
 れど。ホツメと云物。も此に見えたり。考之海藻の義あるべし。
 和名抄に。海藻味苦。鹹寒無毒。和名途木。俗用和布と何。ハ
 グとギハ通へ。バニグメとニギメと。同言にして。即和布の
 義あるべし。ま。ニナメとをると。此ハ和生海藻。柔之海
 藻の義あるべし。因曰最勝海藻門。今謂穗門者訛也。と何。穗門郷
 は。此佐賀關と同郡。中小して。南方に海上七里餘何也。今海
 嶋に保戸嶋と云が何也。其稱存れ也。其地方此出崎を藩

橋氏ハ、呼、曰、訶摩登。是亦保登之轉訛也。と云れり然も何
るべくや。○後云、明治十二年此郡區改制に海部郡を南北
に分く。水、總門、郷ハ南海部郡に屬し、佐賀郷ハ北海部郡に
屬す。○又序云、保戸嶋より東北二里許、佐賀関を距ハ東
南五六里、此澳に向、嶋と云、ガ、何、此、嶋、明治六年の頃、備前
國、人、戸、川、七、郎、と、云、者、賜、ハ、リ、テ、開、墾、せ、む、と、せ、し、に、嶋、の、狀
いと奇しく、嶋山の頂に佛家に用ふる須弥坦の如き磐石
の間に道を取て、須弥の如き磐石の上に神社を建むと、思立し
人謀りて、開拓に手を著、神社をも建むと、し、あり、き、此、も、神
遊の地、心、や、何、ら、む、彼、三、神、山、ハ、無、底、之、谷、と、る、歸、墟、中、に、在
る、と、し、是、三、神、山、の、屬、嶋、あ、ら、む、も、知、べ、う、ら、ば、師、ハ、仙、界、に
謂ゆる方丈洲ハ、我、淡、路、園、あり、と、云、れ、き、右、等、ハ、参、考、に、あ
る、べ、く、れ、を、記、此、備、郡、米、之、門、又、你、那、を、い、の、に、訛、れ、を、せ、て、
加へ、於、る、あり、此、備、郡、米、之、門、を、い、の、に、訛、れ、を、せ、て、
保登と呼ぶべくを思はれ、故考ふるに、彼最勝海藻の
生る滑所あるからに、會門ハ義以て稱するに非ざるの。
戸、邊、

に、行、見、る、事、如、し、自、其、地、に、行、テ、親、く、古、老、に、問、試、さ、せ、
ら、む、小、ハ、浦、人、の、口、碑、に、存、れ、る、傳、説、の、何、ら、む、も、知、れ、ば、
ま、れ、此、速、吸、名、門、に、程、遠、か、ら、ぬ、處、に、海、藻、と、い、ひ、保、登、と、い、
牙、る、あ、ら、む、か、こ、く、本、辭、經、あ、る、師、説、小、由、何、に、て、お、お、ゆ、也、但、
早、鞠、心、ハ、若、海、布、名、産、小、て、海、布、刈、の、神、事、あ、ど、あ、る、と、穴、門、
を、彼、滑、門、の、義、と、し、て、見、あ、む、彼、方、由、何、り、て、聞、か、れ、り、師、ハ、
云、れ、ざ、り、し、故、心、序、○海、心、ハ、万、物、を、生、出、し、彼、玄、牝、之、門、を、
に、驚、う、し、お、く、あり、
云へ、協、を、正、廣、く、總、て、此、海、心、も、及、ぶ、して、ウ、三、を、云、へ、る、と
ふ、師、説、に、因、て、思、ふ、に、此、説、古、史、傳、二、之、卷、
速、吸、名、門、の、名、門、を、洋、の、義、あ、ら、む、を、釋、き、こ、し、然、れ、を、ナ、ダ、は
ナ、ド、の、轉、じ、る、言、小、て、生、門、の、義、あ、ら、む、總、て、此、大、洋、心、も、及、
ぶ、し、稱、へ、る、に、非、ざ、る、也、
會、門、ハ、聖、生、門、の、義、
あるを思ふべし、其、生、を、ウ、ム

少いひ。生ウミの本聲ウミル宇ハ潤ウミの義あるを。本辭經小云、れ
 其潤ウミも。やがて滑ウミと同意の言あり。漆ウミをウルシともヌル
 を塗ウミとハ云あり。又濡ウミル潤ウミフあとにて潤ウミ滑ウミ同意の言ある
 事を知るべし。風土記の多生海藻而甚美とある美字をウ
 ルハシと訓べく是も潤ウミと
 同義あるをも思合をべし。さて前小引ける。本辭經ある海
 苔ウミも。生ウミ和滑ウミ埏ウミ乘ウミの乘ウミあるが。糊ウミ小同くして是亦滑潤小
 義同し。漆ウミ肉ウミ醬ウミあと糊ウミに類ウミと。彼穂門ウミ小生ウミちふ。海藻ウミも。海
 苔ウミと同類の物あるに。海藻ウミ海苔ウミよと藻ウミの同類ある事ハ和
 也。文選云、海苔ウミ之ウミ彙ウミ海苔ウミ。名抄ウミ藻ウミ音早和名毛ウミ。一云毛波水菜
 即海藻也。とあるが如し。海苔ウミ生ウミて滑ウミ所ウミある處大地の會門ウミ
 脈ウミ流ウミを。人躰ウミの會門ウミ小も及ウミがして。然云へるを。し。師說あ
 るが。會門ウミ會門ウミあど熟字しとるを。ホトと訓むに。門戸ウミの字
 をトとよむ。小ハ非ウミ也。義を取れるのみあり。ホトとハ

會ウミ所の義小して。ト小ハ所字填れり。滑ウミ所ウミ。
 又次に云ふ御會所の所字を思ふべし。其會門ウミ字俗にオ
 メコ又メ、コと云ふ。是ハ御會所ウミ女會所ウミの義あるが。會
 門ウミは海藻ウミと同稱あり。其海藻ウミの彙ウミれ流ウミ藻ウミ形も。會門ウミのホに通
 ふ免ウミふ。腿ウミまウミ會門ウミを俗にホウミと云。ホとモを親ウミく通ウミふ音
 相ウミ轉ウミり。相ウミ通ウミふ事ハウミに云。益ウミをへきに非ウミ也。訓ウミの繙ウミに云
 へり。轉通言の例と。同言ハ同意ある例と云篇を披見べし。
 右小云へる言移も考ウミして。風土記傳の滑ウミ所に縁ウミあ
 るは。大地の會門ウミと流ウミ速吸名門ウミを。豊後ウミあるは。記ウミを知る
 牙ウミし。明治五壬申年七月。佐賀關の旅舎ウミ小記に。

と書きの証録と云ふは其の事なり
我れありては——其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは

其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは
其れもよと云ふは其れもよと云ふは

明治十八年二月十二日御届
同年三月廿日出版

定價金三十五錢

大分縣士族

著者 田近陽一郎

豐後國大分郡大分村
五千四百三十三番地寄留

同縣士族

早吸日女神社祠官

出版人 關 眞 龍

豐後國北海部郡関村
六百八十三番地住

